

クローズアップ Close-UP

女性とオフィスと仕事を考える

日本経済再生の起爆剤ともいわれるネット・ベンチャービジネス。
今回クローズアップするのは、そんな時代性を具えた
激動のマーケットに挑む一人の女性。
大企業での安定したキャリアを捨て、
ベンチャー企業での夢の実現を選んだ一人のビジネスウーマンは、
何を感じ、何を決断し、その視線の先に何を捉えているのだろうか。

ハードワークな日常の中で 自分を見つめ直す

今回お話をうかがった宇賀神絹予さんは、今春、10年以上勤めた大手商事会社を退社し、ベンチャービジネスの世界に飛び込んだ。彼女が勤務する㈱イーエックスネットコムは、代表取締役社長と開発担当のシステムエンジニア、そして、企画営業兼秘書兼経理を担当する宇賀神さんの3人所帯。まさに、近年注目を集める“ネット・ベンチャー”の典型的な企業である。ソフトウェアやシステム開発など、インターネット関連の各種ネットワークビジネスを展開する同社の立ち上げに、彼女はスタート段階から携わったという。

「会社設立後の3ヵ月間は、修羅場のような生活が続きました。種々の事情で、以前勤めていた会社から籍を置いたまま、その会社の通常の業務をこなし、その後、新会社の業務を立ち上げるため、連日、深夜1時、2時までコンピュータに向かっていました。とにかく、新たな商品の企画から、会社設立にかかる書類作成、事務処理など、やらなければならない業務が山積



う が じん きぬ よ 宇賀神 絹予さん

してまして……。以前は、アフター5は同僚と食事やショッピングを楽しむ普通のOL生活を送っていましたので、そのギャップには天と地の開きがありました(笑)。

いきなり、新しいビジネスの世界の厳しい洗礼を受けた宇賀神さんだが、彼女がそんなハードな日々の中で感じたものは何だったのだろうか。

「大企業での安定した生活を捨てベンチャーに身を投じるぐらいですから、自分は猪突猛進型の男勝りの性格だと思っていたんです。しかし、いざ新規事業の渦中に飛び込んでみると、ふっと、臆病になっていたり、一歩身を引いている自分に気がついたりして……。特に、会社がスタートした当時を振り返ると、あと一歩を踏み出せなかったことが多く、『私にも女性的な一面があったんだなあ』と驚いたりもしました(笑)。もちろん、ベンチャーだからといって、『単に前にさえ進めばいい』というわけではありませんから、それが良かったのか悪かったのかは、もう少し後になってから評価されるのでしょうか……」。

今の時代、女性だからといって臆病であるとは限らない。むしろ世の中を見まわすと、逆のケースも少なくない。女性的かどうかの評価はさておき、彼女にとってこの転職が、自分自身を冷静に見つめ直すいいきっかけになったことは確かなようだ。

これからが自分の集大成 機動力を生かしたビジネスを

先述したとおり、宇賀神さんの

担当業務は、新システムの企画からその売り込み営業、社長秘書、日々の収支管理や資金繰りなど、まさに多岐にわたる。マンパワーに限界のあるベンチャーではやむを得ないことかもしれないが、仕事に追い込まれてしまうことはないのだろうか。

「新会社での業務は、これまで私が蓄積してきた知識やノウハウを最大限に生かす絶好の機会と位置づけています。その機会を得ようとすると、必然的にベンチャー企業ということになったわけです。従来は、担当業務がいくら重要なものであっても、それはビジネスの一つのパートに過ぎません。しかし、現在は逆に、どんなに些細な雑務であっても、業務のすべてが会社の将来に直結していると実感できるんですね。単に仕事に追われ、流されているだけでは、以前と同じです。何のためにこの業務を処理するのか、お客様は何を求めているのか、このトラブルはなぜ発生したのかといった、仕事の本質を常に考えながら企画したり営業したりしていると、自分の仕事の意義と自分自身の存在価値が自然に実感できるんです」。

大企業で10年間かけて蓄積したビジネススキルのすべてを注ぎ込もうとする彼女。もちろん、めざす将来ビジョンも明確だ。

「大企業は、より良いものをより多く売るのが使命で、コンピュータ業界でいえば、企業が作り上げた画一化された商品にお客様が合わせていくというビジネススタイルです。しかし、私たちのようなベンチャーの“強み”は小回りが

利くことですから、お客様に商品を近づけ、細かなニーズに的確に対応するものを提供していくことだと考えています」。

ベンチャー起業家は個性的なキャラクターの持ち主が多い。ややもすると、企画でも営業でも、『これが一番』といった、自己満足や自己本位な評価になる傾向が少なくないといわれる。しかし、宇賀神さんは、「それは大企業のやり方であって、私たちベンチャーのやり方ではない」と強く反論する。

「理想は、漠然とした市場ニーズを形にすることから生まれた、世界共通のスタンダードを企画すること。ベンチャーの機動力を生かして、自由に発想し、スピーディにムダなく動いていけば、きっとチャンスはあると思います」。

オフィスがある渋谷を歩いている時も、友人とのたわいのない会話の中にも、もちろんビジネスの現場でも、常に「世の中が何を求めているのか」を考え、追求し、そして形にしようとするポジティブな姿勢。

取材の最後に、笑いながら、「夢は、打倒、iモード」と語ってくれた彼女。時代の大きなトレンドは、常にこのような人から発信されていくのではないかと感じた取材であった。

